

18 聚楽第と御土居

じゅらくだいとおい

知る

聚楽第って何？

聚楽第は豊臣秀吉の京都における邸宅として、内野（平安京大内裏旧跡）に建築されました。秀吉は、天正十三（一五八五）年閑白に任官すると、翌年から聚楽第の造営を始め、同十五年に完成しました。聚楽とは「長生不老の楽しみを聚める」という意味です。「じゅらくくわてい」とも読みます。

聚楽第の構造は、北は元誓願寺通、東は堀川通、南は押小路通、西は千本通を外郭とし、内郭には本丸を中心に北ノ丸、南二ノ丸、西ノ丸の曲輪が築かれていたと考えられています。しかし、徹底的に破壊され、そのうえ全面的な発掘調査が不可能なので、正確な範囲はわかっていません。



17世紀初めの「京都図屏風」に描かれた聚楽第内郭の堀跡を附近の現況に重ねた。現在の通りとの位置関係は森島康雄氏の復元案に従った。

発掘調査の結果、幅三十メートルを超す大規模な堀がめぐらされていたことがわかっています。堀の外には武家屋敷が配置されました。如水町（黒田如水）や浮田町（宇喜多秀家）など町名にそのなごりを留めています。

天正十六（一五八八）年、聚楽第に後陽成天皇が行幸し、秀吉はその場で諸大名から誓紙を取り、政権の基盤固めを行いました。

同十九年、秀吉は甥の秀次を閑白に就任させ、聚楽第を譲りましたが、文禄四（一五九五）年秀次を自害に追いやると、聚楽第も破却しました。その遺構の一部は、当時造営中だった伏見城に移されました。

聚楽第の跡地では、勧進能が行われ、芸能興行の場となりました。その後、次第に人家が立ち並び、聚楽組と呼ばれる上京の町組の一つとして編成されました。

町屋から運び出される塵芥で聚楽第の堀は埋められ、その地に聚楽無菁、聚楽（堀川）牛蒡などの京野菜が作られました。また、聚楽第跡地の地下から得られる茶褐色の土は聚楽土と呼ばれ、土蔵の壁土として利用されてきました。現在では茶室などの最高上塗専用土として使われています。

御土居って何？

秀吉による京都都市改造の一つとして、天正十九（一五九

一) 年、御土居と呼ばれる土塁が構築されました。御土居は軍事的防衛や洪水対策とともに、洛中と洛外を明確に区別する役割がありました。

東は寺町東辺、西は紙屋川、北は鷹峯・上賀茂、南は九条を限り、総延長約二十三キロメートル。場所によって異なりますが、土塁に附属した堀幅は約四十八メートル、土塁は高さ三メートル、基底部の幅九メートル。

土塁の上には竹を植えて盛土を保護していました。また、一般に「七口」と総称される出入口(鞍馬口・大原口・荒神口・粟田口・伏見口・東寺口・丹波口・長坂口など十か所ほど)が設けられ、そこから全国に通じる街道が延びていました。

慶長年間(一五九六～一六一五)には既に一部は壊され、市街地の拡大とともに御土居の破壊が進みました。とくに東辺の河原町通・寺町通沿いは早くから市街地に変えられました。現在では北辺と西辺・東辺の一部が残存し、国指定史跡となっています。

近年、御土居と同時に掘られた堀が土塁と不可分なものとみなされ、御土居堀という名称が提案されました。

歩く/見る

聚楽第跡 上京区堀川下立売北西周辺

聚楽第は、文禄四(一五九五)年、完全に破壊されたので、その範囲を確定するのは困難ですが、その外郭はほぼ元誓願

寺通、堀川通、押小路通、千本通に囲まれる辺りにあったことは確かです。

城内の施設や周囲に置かれた武家町は、現在の町名や通り名にそのなごりを留めています。山里町、下山里町、如水町、加賀屋町、浮田町、直家町、田村備前町、福島町、主計町、弾正町、日暮通、黒門通などがそれぞれです。

なお、聚楽第の遺構と伝えられるものとして、西本願寺飛雲閣(下京区門前町)や、大徳寺唐門(北区紫野大徳寺町)などがあります。

松林寺 上京区智恵光院通出水下

松林寺境内南の地面は新出水通より低く、寺の門から本堂裏にかけてさらにくぼんだ部分があり、聚楽第外郭の東西方向の堀にあたりと考えられてきました。平成九(一九九七)年の発掘調査から部分的な外堀の一郭であったと見られています。

御土居跡

御土居は、市街地の拡大がいちじるしい東辺から破壊が進み、明治時代になると大部分が壊されました。

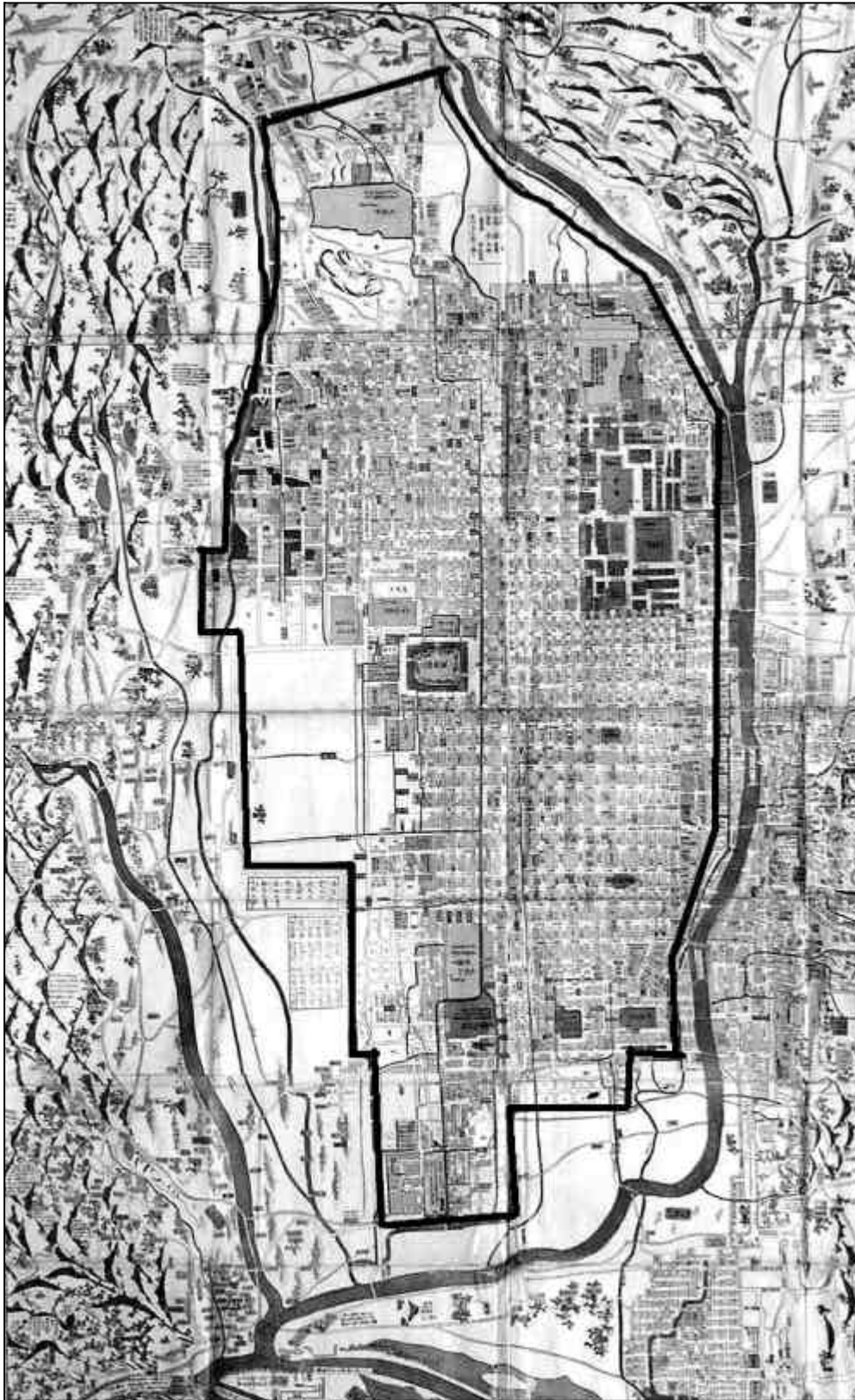
現在、僅かに残存する御土居のうち、以下の九か所は国指定史跡になっています。

- (1) 北区鷹峯旧土居町
- (2) 北区大宮土居町
- (3) 北区紫竹上長目町・上堀川町



- (4) 上京区寺町広小路上ル北之辺町（廬山寺内）
- (5) 中京区西ノ京原町
- (6) 上京区馬喰町（北野天満宮境内）
- (7) 北区平野鳥居前町
- (8) 北区紫野西土居町
- (9) 北区鷹峯旧土居町

なお、(7) 北区平野^{ひらの}鳥居前町の御土居跡は、上の図のように復元整備され、御土居の旧状を示していますが、本来の御土居は土塁の上に竹や木が茂っていました。江戸時代に入ってから、京都町奉行は竹木の保全に努め、上層町^{すみのの}衆角^{すみのの}倉家の支配のもと、附近の農民が管理していました。



御土居に囲まれた江戸時代の京都。天保2年(1831)に出版された「京町御絵図細見大成」
に書き込まれた御土居をさらに太線で強調してみた。